

男女の果たす役割や地位が社会的要請に従っていた前近代とは異なり、啓蒙時代には性役割は「自然の性差」のみによって決定されるという言説が登場し、男性は本質的に強靱、理性的、能動的なのに対して、女性は脆弱、感情的、受動的という二項対立なジェンダー把握が登場した。男性性／女性性という非対称的な差異は、政治・経済・社会・文化のあらゆる制度形成のなかに組み込まれ、近代の市民社会を秩序づける抜本的なカテゴリーの1つとして機能したのである。

そこで、まず啓蒙期に注目して、「自然の性差」とされた男らしさ／女らしさがいかに歴史的に構築されたのかを、宮廷文化と市民性を対比しながら明らかにする。次に、ジェンダーが市民文化にどのように表象されているのか、あるいは文化形成、文化実践にジェンダーがどう関係しているのかについて、市民的音楽文化にジェンダー規範がいかに構造化されていったかという観点から考察する。さらに、社会における男女の居場所の前提条件となる教育について、教育におけるジェンダーを近代家族規範との関係で再読し、ジェンダー間格差と、その変容について取りあげる。最後にドイツにおいて近代家族が揺らぎはじめ、既存の家族制度の彼方であたらしいパートナー関係が模索されはじめた1960年代・70年代に関して、家族変動の諸相、およびそれと連関した男性意識の変化について考察する。この4つの歴史的報告を踏まえて、あらためて現在の位置を確認するとともに、将来の展望につなげていきたい。

（ひめおか としこ・筑波大学）